

BL44XU 生体超分子複合体構造解析

1. はじめに

生体超分子構造解析ビームライン (BL44XU) は、生体内の組織化された機能を理解するために、多様な機構で反応系を制御している生体超分子複合体の立体構造をX線結晶構造解析法により解明することを目的として、大阪大学蛋白質研究所が中心となって建設を進めてきた。本ビームラインは、学術振興会未来開拓事業、科学技術振興事業団 (現 科学技術振興機構) 及び文部省 (現 文部科学省) 補正予算より援助を受けて、1996年度より建設を始め、1999年秋から正式に利用を開始した。その後も補正予算、総長裁量経費及び蛋白質研究所所内予算などの他、タンパク3000やJAXAとの共同研究、ターゲットタンパク研究プログラム、創薬等支援技術基盤プラットフォームなどの外部資金により、検出器や光学系、光学ベンチなどの高度化を進めてきた。

2. ビームラインの概要

SPring-8標準型の真空封止式アンジュレータを光源とし、光学ハッチ内に設置した液体窒素冷却式二結晶モノクロメータで単色化して実験ハッチに導入している。実験ハッチ内には水平集光型のロジウムコートミラーが設置しており、高調波の除去と水平方向の集光を行うことができる (図1)。

回折強度データ測定部は、 μ 軸回転機構付高精度ゴニオメータ、可動式ダイレクトビームストッパー及び照明装置を組み込んだファンシーボックス、2次元検出器及び試料冷却装置から構成されている (図2)。

通常は0.9 Åの単色X線を用いて実験を行っているが、この時のサンプル位置でのミラー集光後のビームサイズ (FWHM) は0.5 mm (W)×0.06 mm (H) である。この波長における Total photon flux は 5×10^{12} であり、スリットの開口幅を $0.05 \times 0.05 \text{ mm}^2$ とした時、 $3.2 \times 10^{11} \text{ photons/sec}$ のビーム強度が得られている。

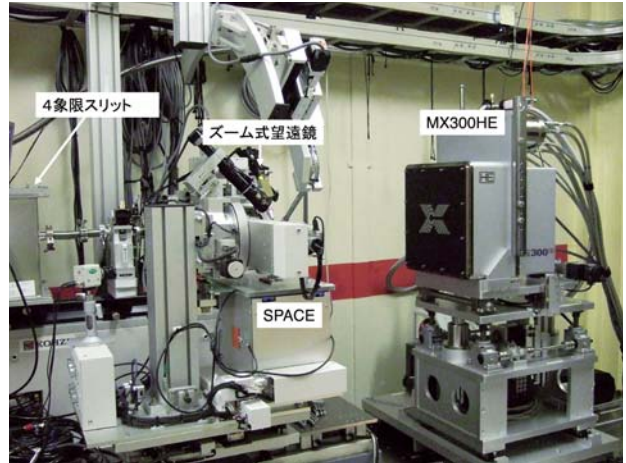


図2 データ収集系

あり、スリットの開口幅を $0.05 \times 0.05 \text{ mm}^2$ とした時、 $3.2 \times 10^{11} \text{ photons/sec}$ のビーム強度が得られている。

2-1 ゴニオメータ部

ゴニオメータ部は、高速シャッター、ビーム整形部、高精度・高速ゴニオメータ、同軸望遠鏡等から構成されている (図3)。これらは、すべて光軸調整機構を有している他、高速シャッター以外のコンポーネントはすべて3軸制御可能な共通のステージの上に乗っており、ハッチ外のPCから簡単に光軸調整を行うことができる。

高速シャッターは、1 msecでの開閉の制御が可能である。これにより部分反射の測定精度を上げる他、微小振動写真法への対応が可能となっている。

ビーム整形部は、ビームの形状の制限とスリット自身による散乱の問題を解消するために、2式の4象限スリットとビームパスを兼ねた0.3 mm ϕ の出口スリットから構成

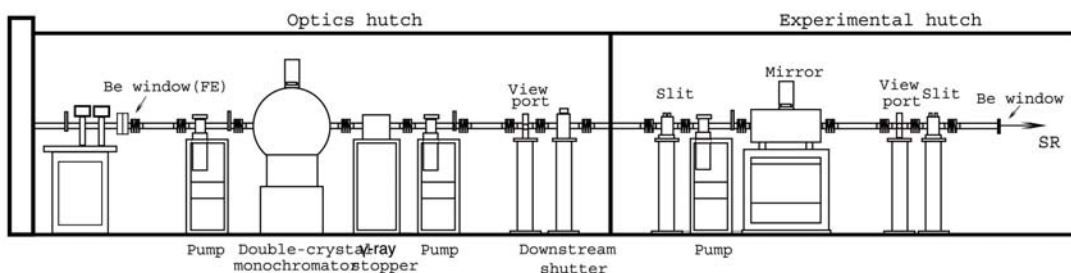


図1 ビームラインコンポーネントのレイアウト図

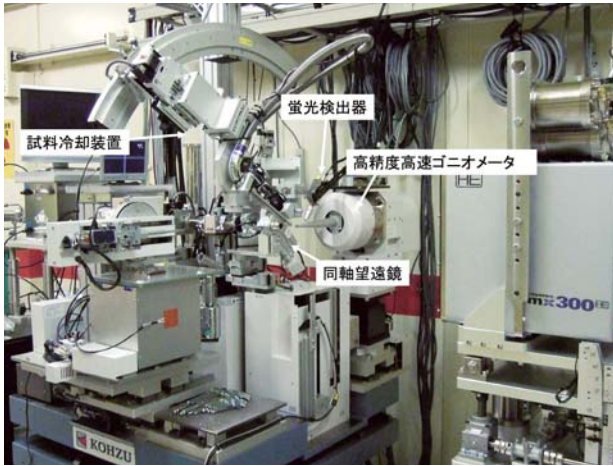


図3 ゴニオメータ部

されている。4象限スリットは1 μm ステップでの制御が可能である。これにより、結晶の大きさ・形に合わせたビームの切り出しが可能である。上流にビーム整形用の4象限スリットを、そこから30 cm 程度下流に出口スリットを設置することにより、スリットからの散乱の問題を解消し、150 Å以下の低分解能領域のデータ収集を可能とした。

ゴニオメータ部はエアベアリングを利用した高精度・高速型ゴニオメータを利用している。本ゴニオメータは、最大偏心精度が± 1 μm以下で、最大180 deg/secで駆動することができ、inverse beam settingの実験が効率良く行える。さらに、このゴニオメータは、試料回転軸をX線の仮想光軸に対して水平面内に0°から15°まで傾斜(ω軸)させることが可能である。

ゴニオメータに取り付けた結晶は、同軸望遠鏡によりハッチ内及びハッチ外で観察可能である。また、結晶のセンタリング(及び望遠鏡のズーム比の変更)は制御用PCから行うことができる。

2-2 2次元検出器

2012年度末に大阪大学総長裁量経費及び蛋白質研究所所内予算により、有効面300×300 mm²の高感度大面積アレイ式CCD検出器(Rayonix MX-300HE)を導入し、そのための新しいカメラ架台を製作した。

2-3 試料冷却装置

タンパク質あるいは生体超分子複合体のデータ収集には、試料の冷却は不可欠である。通常は、液体窒素を利用した試料冷却装置を用い100 K付近の温度でデータ収集を行うが、より低温での実験を行うために液体ヘリウムを用いて35 K程度に試料を冷却することも可能な試料冷却装置を利用することができる。窒素とヘリウムの切り替えは実験に応じて簡単に行うことができる。

2-4 多波長異常分散法への対応

本ビームラインでは、液体窒素間接冷却型二結晶分光器を使用しているため、多波長異常分散法の実験も可能である。通常の利用では、0.7～1.7 Å領域の実験には、ユーザーによるビーム調整なしで、簡単に多波長異常分散法のための波長校正も含めた波長変更を行うことができる。

2-5 ユーザーインターフェイス

SPring-8の他のタンパク質結晶学用ビームラインで利用されているデータ収集システム(BSS)を導入している。これにより、SPring-8の他のタンパク質結晶学用ビームラインの利用経験があれば、わずかな教育のみで本ビームラインを利用することができる。

3. 共同利用の現状

蛋白質研究所共同研究員として全国の研究者からの共同利用実験を受け入れる体制を整え、全ユーザータイムの50%を共同利用に供しており、2012年度は、延べ600人以上が共同利用枠で利用した。海外からのユーザーに対しては、蛋白研国際共同研究員制度を利用した旅費のサポートも行っている。さらに、台湾国立放射光科学研究センター(NSRRC)との共同研究協定に基づいて、Academia Sinicaを中心とした台湾構造生物学研究グループに対してビームタイムを供している。

共同利用実験課題募集は年1回1月初旬に行われている他、重要な研究成果が期待され新たに結晶ができたものに関しては、緊急課題として随時実験課題を受け入れている。

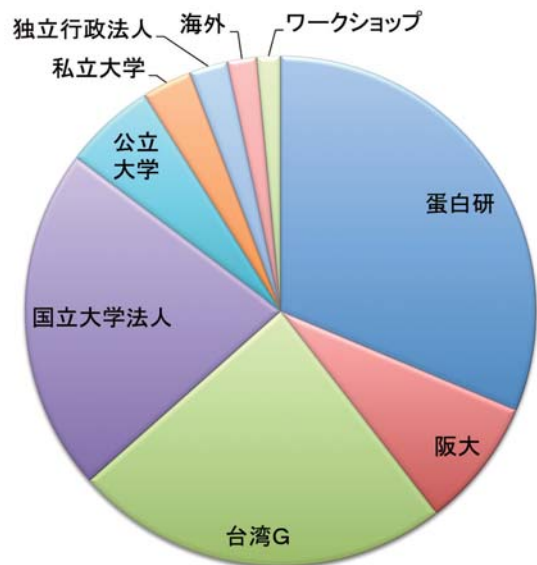


図4 2012年度のビームタイム配分結果

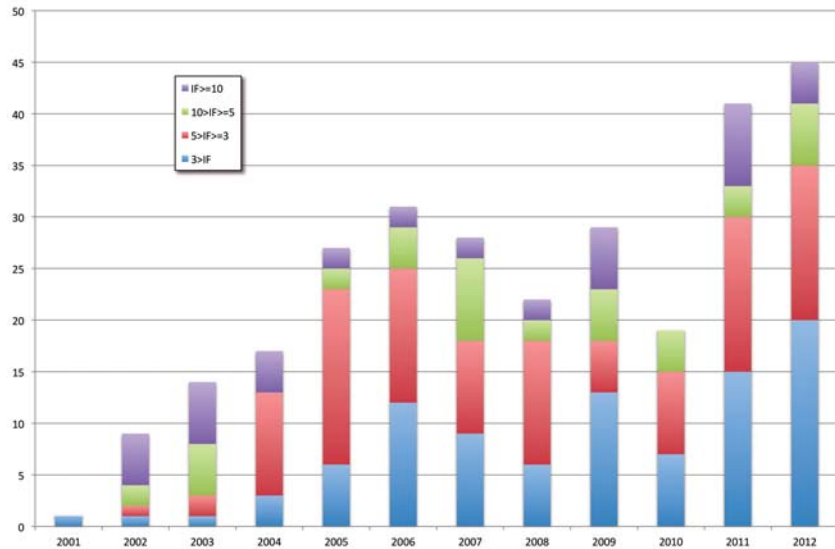


図5 ビームラインを利用した成果（発表論文数）

4. 創業等支援技術基盤プラットフォーム

創業等支援技術基盤プラットフォームの支援業務として、超分子蛋白質（格子定数の大きな結晶）のデータ収集に関する支援を行っており、ビームタイムの10%程度を支援枠として確保している。

5. 超分子複合体の代表的な成果

Vaultは、分子量13000万の巨大な蛋白質核酸複合体である。Vaultの結晶は、空間群C2に属し、格子定数が $a = 707.2$, $b = 383.8$, $c = 598.5 \text{ \AA}$, $\beta = 124.7^\circ$ の巨大な単位格子からできている。本ビームラインを利用して、 3.5 \AA 分解能の回折強度データの収集に成功し、その原子構造を決定した (Tanaka *et al.*, Science, 2009)。

2012年度の主な成果として、セントロメア結合蛋白質複合体 (Nishino *et al.*, Cell, 2012)、赤痢菌の防御機構を担う蛋白質 (Sanada *et al.*, Nature, 2012)、膜結合型 H^+ 輸送性ピロホスファターゼ (Lin *et al.*, Nature, 2012)、ペニシリン結合蛋白質およびトランスグリコシラーゼとlipid IIとの複合体 (C.-Y. Huang *et al.*, PNAS, 2012)、電位依存性プロトンチャネル細胞質領域 (Fujiwara *et al.*, Nature Commun., 2012)、ダイニン (Kon *et al.*, Nature, 2012) などが挙げられる。

6. 国際共同研究

NSRRCと研究協定を結び、ビームラインの相互利用や高度化に関する共同研究を進めている。

大阪大学

中川 敦史、山下 栄樹

東浦 彰史

(独) 理化学研究所・放射光科学総合研究センター

(公財) 高輝度光科学研究センター

山本 雅貴

(公財) 高輝度光科学研究センター

熊坂 崇